

症例報告

## 腹腔内巨大腫瘍を呈した犬の前立腺嚢胞の1例

佐藤敏彦

### 要約

下腹部腹腔内に巨大な腫瘍が認められた9歳、オスのラブラドルレトリバーに対し、腫瘍病変を疑い種々の検査を行った。膀胱、前立腺に関連する疾患が疑われたが悪性腫瘍病変が否定されたため試験的開腹を行った。腫瘍は周囲組織に癒着していたがその基部は前立腺に連続していた。腫瘍切除後の経過は順調で再発はみられていない。病理組織学的検査では前立腺嚢胞と診断された。

キーワード：血尿，腹腔内腫瘍，前立腺嚢胞

雄犬で血尿などの臨床症状を示し、腹腔内に腫瘍状病変が存在する場合、腎臓、膀胱、前立腺に関連した病変が考えられるが、中年齢以降の犬では腫瘍性疾患を除外して考えることはできない。他院にて腫瘍病変を指摘され、本院に紹介された症例に対して種々の検査を実施した。悪性の腫瘍性疾患は否定的と考えられ、試験開腹による切除後、病理組織学的検査にて巨大腫瘍を形成した前立腺嚢胞と診断された症例についてその概要を報告する。

### 症例

症例はラブラドルレトリバー，雄，9歳，体重33.2kg。身体検査所見では下腹部に巨大な腫瘍が触知され，血尿，尿淋瀝，頻尿傾向がみられた。血液検査および血液化学検査では異常はみられなかった。腹部X線検査（図1，2）および静脈性尿路造影検査（図3）では巨大腫瘍の尾側に膀胱と思われる造影像とさらに尾側に前立腺と思われる画像が認められた。超音波

検査所見では腫瘍の内腔はエコーフリーで，さらにその中に腫瘍が存在していた。膀胱カテーテル細胞診および尿の細胞診では異常細胞は認められなかった。

臨床経過：以上の所見より腫瘍は膀胱から発生または膀胱を巻き込んでおり，腫瘍性病変も否定できないが悪性腫瘍と診断できる所見が得られなかったことから，飼い主の了解を得て試験開腹を行った。腫瘍は硬固で膀胱，左右の尿管，



図1 腹部単純X線写真背腹方向像

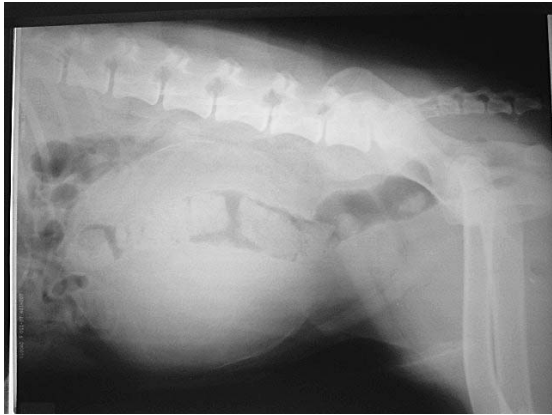


図2 腹部単純X線写真側方向像

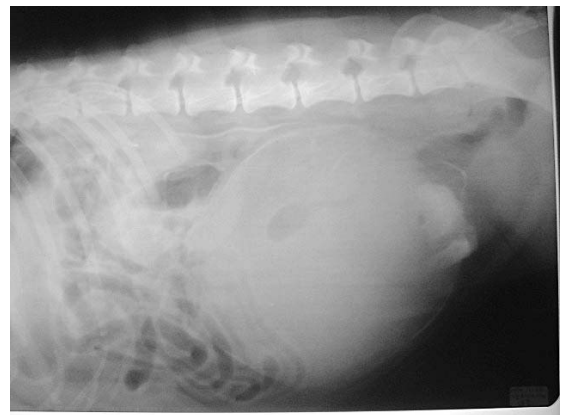


図3 腹部尿路造影X線写真側方向像

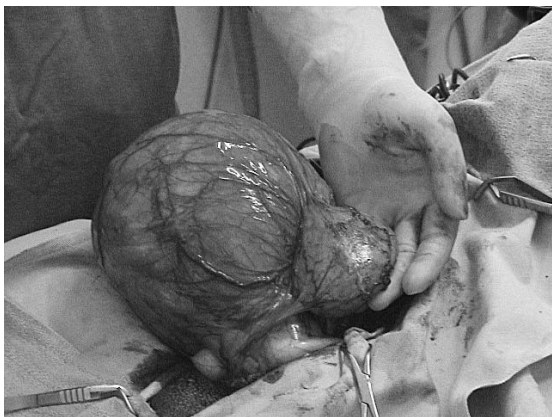


図4 腹腔から摘出した時の腫瘍



図5 摘出した腫瘍は概ね直径16cmの球状であったる [1, 2] が、石灰化所見は認められず、術前診断に苦慮した。しかしながら解剖学的に左右の尿管が確保されていることと腹部の触診にて切除可能と判断したことから試験開腹を行った。腫瘍に癒着している尿管を識別することは困難であったが、膀胱を切開し尿管開口部からカテーテルを挿入することで識別が容易になった。

周囲脂肪組織と癒着していた (図4)。膀胱、周囲組織および左右の尿管を識別分離したところ腫瘍根部は前立腺に連続していた。前立腺の部分切除により腫瘍を摘出し (図5)、常法通り閉腹した。術後の経過は良好であったが頻尿傾向はしばらくの間持続した。術後の病理組織学的検査により前立腺嚢胞と診断された。現在術後1年以上経過するが排尿障害、前立腺肥大等もみられず状態は良好である。

中高齢以上の犬の腹腔内腫瘍は多くの場合腫瘍性病変を疑うが、非腫瘍性の良性病変もみられることから詳細な検査、診断が大切であると思われた。

### 考 察

前立腺嚢胞は前立腺内あるいは前立腺に接して形成される嚢胞状病変であるが、前立腺実質内に発生する実質性前立腺嚢胞が犬では一般的である [1]。症例は実質内ではなく前立腺に接して巨大腫瘍を形成していた。また、嚢胞は拡張するにつれ融合し、骨化した硬いコラーゲンにより取り囲まれ、単純X線検査では前立腺や嚢胞壁の石灰化が認められると報告されてい

### 引用文献

- [1] Fossumu TW: Small Animal Surgery 第2版, 若尾義人, 田中茂夫, 多川政弘監訳, 698-702, Inter Zoo 東京 (2003)
- [2] Ogilvie GK, Moore AS: 動物の癌患者治療管理法, 松原哲舟監訳, 389-392, LLL Seminar 鹿児島 (1996)